

: 1 : 0) に対し洗淨強迫では(2 : 1 : 2 : 2 : 1)

考察：患者の反応率は63.6%であり日常の外來で実施可能な1セッション20分という枠でも短期CBTはOCDに対して有効であった。薬物療法と比べても同程度の治療効果がある。Y-BOCSで評価したところ確認強迫と洗淨強迫とで治療効果に差は見られなかった。確認強迫と洗淨強迫における適応した認知モデルの違いは強迫症状の特性によると考えられた。以上のことから強迫性障害に「認知的」技法を主体とした短期認知行動療法は有用であった。

本学位論文は、強迫性障害に対する認知再構成法などの認知的技法を中心とした短期行動療法の有用性を検討した論文である。短期的技法の開発を目指して、日常の外來で実施可能な1セッション20分という設定でも十分に有効であることを証明した臨床的意義の高い論文である。よって本論文は医学博士の学位論文に値すると判断される。

氏 名	つじい の 農 壘
学位の種類	博 士 (医学)
学位記番号	医 第 9 1 7 号
学位授与の日付	平成 19 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規程第4条第1項該当
学位論文題目	Association Between Activity Level and Situational Factors in Children with Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder in Elementary School (注意欠陥 / 多動性障害児童における学校場面での活動水準と状況要因との関連)
論文審査委員 (主 査)	教 授 人 見 一 彦
(副主査)	教 授 楠 進
(副主査)	教 授 竹 村 司

【目的】

注意欠陥／多動性障害児童（Attention-deficit/hyperactivity disorder: AD/HD）は発達的に不相応な、また一貫していない水準の不注意、衝動性、多動性によって特徴づけられる。主観的な行動評価を使用した多くの研究から、AD/HD の症状は状況要因により影響を受けることが指摘されている。本研究の目的は、AD/HD 児童における学校場面での客観的な活動水準が、状況要因とどのように関連しているか見いだすことである。

【方法】

混合型 AD/HD と診断された 16 人の児童と、性別と年齢が調整された 20 人の対象児童が本研究に参加した。全ての参加者は、活動水準の客観的な測定機器（アクチグラフ）を学校に登校した 1 週間装着した。平均活動水準は、午前と午後の各授業ごとに測定された。また、各クラスは以下の 4 つに分類された。（1）座る授業（参加者が静かに自分の席に座って学ぶことを期待される授業）、（2）座らない授業（参加者が座ることを強制されなかった授業）、（3）体育、（4）昼食／昼休み。

【結果】

午後の座る授業では、ADHD 群の平均活動量は対照群よりも有意に大きかった（ $p < 0.05$ ）。しかし、午前の全ての授業、午後の座らない授業、体育の授業および昼休みでは、群間の有意な差を認めなかった。

【考察】

これらの知見は、自然な状況では、抑制を求める環境の要因と、午後であることによる疲労の効果が重なったとき、AD/HD 児は対照群よりも大きい活動量を示すということであり、AD/HD 児への教育的・治療的働きかけを考える際に有用な示唆を与えるものである。

博士論文の印刷公表	公 表 年 月 日	出版物の種類及び名称
	2007 年 月 日 公表予定	出版物名
	公 表 内 容	Psychiatry and Clinical Neurosciences
	全 文	2007 年 月 日 発行予定

【目的】

注意欠陥／多動性障害児童（Attention-deficit/hyperactivity disorder: AD/HD）は発達的に不相応な、また一貫していない水準の不注意、衝動性、多動性によって特徴づけられる、主観的な行動評価を使用した多くの研究から、AD/HD の症状は状況要因により影響を受けることが指摘されている。本研究の目的は、AD/HD 児童における学校場面での客観的な活動水準が、状況要因とどのように関連しているか見いだすことである。

【方法】

混合型 AD/HD と診断された 16 人の児童と、性別と年齢が調整された 20 人の対象児童が本研究に参加した。全ての参加者は、活動水準の客観的な測定機器（アクチグラフ）を学校に登校した 1 週間装着した。平均活動水準は、午前と午後の各授業ごとに測定された。また、各クラスは以下の 4 つに分類された。（1）座る授業（参加者が静かに自分の席に座って学ぶことを期待される授業）、（2）座らない授業（参加者が座ることを強制されなかった授業）、（3）体育、（4）昼食／昼休み。

【結果】

午後の座る授業では、ADHD 群の平均活動量は対照群よりも有意に大きかった（ $p < 0.05$ ）。しかし、午前の全ての授業、午後の座らない授業および体育の授業では、群間の有意な差を認めなかった。

【考察】

これらの知見は、自然な状況では、抑制を求める環境の要因と、疲労の効果が重なったとき、AD/HD児は対照群よりも大きい活動量を表すということを示す。AD/HD児への教育的・治療的働きかけを考える際に有用な示唆を与えるものである。

本学位論文は、主観的行動評価に頼りがちであった注意欠陥／多動性障害について、アクチグラフを用いることにより活動量の客観的評価を試みた研究である。授業における抑制を求める環境の要因と疲労が重なったとき、対象群よりも有意に大きな活動量が認められた。これは本児への教育的・治療的働きかけを考える際に有用な示唆を与える臨床的意義の高い論文である。よって本論文は医学博士の学位論文に値すると判断される。

氏名	ながしま みき 樹 永 島 美 樹
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	医 第 918 号
学位授与の日付	平成 19 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規程第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	Regulatory failure of serum prohepcidin levels in patients with hepatitis C (C 型肝炎患者における血清プロヘプシジン濃度の調節異常)
論文審査委員 (主査)	教授 工 藤 正 俊
(副主査)	教授 伊 藤 浩 行
(副主査)	教授 金 丸 昭 久